



岷江入楚

卷上
才武曲

特別
~ 12
4604
33



4604
33



若菜上

亦九歲

太上天皇

朱雀院所惱事

梅童女即取女三宮所事

永享十三年

同宮下有所蒙美事

春宮行落朱雀院事

年暮中納言若菜朱雀院所物語事

若菜上九年十月廿一日
若菜上九年十月廿一日
若菜上九年十月廿一日

朱雀院三宮即乳母逢物所事

所乳母所居中事
朱雀院家司
女三宮可被附屬中
六歲

女三宮下就尚侍為所子
朱雀院家司
女三宮可被附屬中
六歲

女三宮下被附屬中
朱雀院家司
女三宮可被附屬中
六歲

女三宮所蒙美事
朱雀院家司
女三宮可被附屬中
六歲

女三宮下為所腰結事

秋好中宮獻紫束檜宮於朱雀院事

小汀文庫

前事二十日以後未在院所如家也 山后屋為亂賊所
六條院渡未在院始女三宮所後見市鎮狀也
又之日女三宮也 諸禁上行也

二十日
女三宮下渡六條院始也 又六條院中守御所也

正月十二日左右將小方始若草也

大將男三人此以見系六條院也

依未在院所未下台不人斬有取遊也

二月十日女三宮渡六條院始也

南即殿放也立取帳也
禁上女三宮也
禁上見源氏所多發也
源氏自禁上取方送消息於女三宮所方始也 女三宮位長
源氏畫時分渡女三宮始也 殿始也

未在院移西山取也始也

未在院所消息於女三宮始也

月道所交於禁上行也

臘月夜內侍上位二條宮源氏密通也

女房中納言若中 和泉前司引導也

池藤盛也

內侍上對面也 諸禁上行也

明石前自交此取胞氣暫出六條院始也
南取殿東面為所始也 禁上行也 方(口)り始也 以對面也
女三宮(口)り對面也 始也

源氏見禁上行初也

明石女所禁上行女宮也 各以見也

十月禁上為六條院所始也 始也 始也 始也 始也

十三日於二條院有始也

於渡殿放也 始也

十二月廿日余秋好中宮為源氏所始也 始也 始也

夕帶中納言也 始也

自内裏賜六条院所御事、夕暮大相事、良町方事
三十一歳、日

正月一日始明石女所御所行市、歳十二

二月明石女所渡、明石町中村行市

明石江若女、与女所、以抄信

三月十日、女所、行市

七日、東自内所、産在事

明石入道、文送、母若事

須弥山、多事、同送、江若、文市

明石、上春、女所、方奉、身入道、文若事

世、上寿、抱若、事

源氏、若見、彼文、若信事

世、上、与、心、上、所、中事

大將、若、与、女、三、文、所、事

柏木、在、末、門、皆、与、女、三、文、所、事

三月、廿六、条院、有、鞠、興事

大將、先、在、良町、有、鞠事

文、在、夜、殿、東、面、蹴鞠事

在、末、門、皆、自、所、産、降、奉、身、女、三、文、事

食、椿、餅、未、飲、酒事

在、末、門、皆、与、大將、同、車、退、在、信事

在、末、門、皆、付、小、侍、從、在、文、女、三、文、事

在、末、門、皆、抱、猫事

若東と以平并詞為卷名

何小松糸末の...は...の...
私を初...なる...の...
の...
わ...
は...
あ...

一部内立上下

唐書例

礼記 曲礼上下

廿二 廿三 檀弓上下

尚書 大甲

盤庚

說命

泰誓

在二中下

周礼 天官

冢宰

以下 卷...

以下 卷...

漢書 高紀 上下

同下

後漢書 列傳 廿廿卷 上下

和語例

日本紀 廿一 廿二 神代 上下

うい... 獨の... 又... けの上 同下

十二... 十三 同 卷下 廿五... 同下

和漢の古籍... 例... 中... 作...

平巻名原氏百十からをむろりの一紙にうらむり
てい巻の紙は原印廿九の巻より百十の巻又平巻
一紙の巻をうらむ

若存院のふりあり一巻の巻

に友言をまにしら若院より巻あり

秘古多院(所巻)

わらわあり

早病女の物也 霊運 日本に結句也

源の正史若存院の巻

行こういのかりあり

若存院の巻は人の巻

中さいのふれあり

私私書成れは后之世母后崩の巻

てい巻の巻をうらむ

若存院の巻は人の巻

後巻をうらむ

けうの巻をうらむ

秘古多院の巻

あつらひの巻

此の用意は勿論也女はよりか
 中よりあるが如くは有りしと
 海にわしをぬかのつてさう
 春久をきくことありし

朱在院の子は今日とてをさう
 除より字をさして林をさう
 いらさうりうはそいのか
 いらさうりうはそいのか

朱在院

今上

母長香殿女御
 明名太子二歳より
 物々しくいん服を著すは位よ

女一宮

長香

落葉宮

母一茶所息女
 長香下は柏木右衛門坊の
 のりより長香らわらう

二内親王

母長香源氏宮

長香より多院より
 長上をうらみなり
 長上をうらみなり

女二宮

長香に

朱在乃のみより 春久といしと乃のみより 朱在院

七昇同

日ころあ

花女一より長香女三より女四より

うのりより長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

長香女三より女四より 長香女三より女四より

まゝ坊とすこしとせ

朱在院のまゝなれ河内白河流印入内

そりねくくおと

丹后れしをり朱在院乃川代も店立のそり

秘之店しをり人な仕成りしそり

互店かしそり内侍か今より三店をり今より

をれゆかよあつりそり三店がにそり

そりゆりそり

大まゆりの内侍り

私徴及乃賦月也をあし人かりそり

かよひゆのそり

丹朱在院のゆりそり

月也をあつりそり

秘朱在乃ゆりそり

にりそり

花朱在乃服履かゆりそり

世中をり

流印なせ

うのり

なとえり

いり

朱在の

いり

いり

いり

いり

いり

いり

いり

いり

河本新王記 天曆三年四月十五日 大正天皇 遷御 仁和寺院

原子内親王 所承 七月十日 出家

新國史 仁和元年八月十七日 於新造西山御殿 行光帝

因之御命 しの葉西のりあるはまの仁わちをりあり
たなをてまのの心けちして仁わちをりあり
仁わちをりあり則ち若き皇の一日れの命をりあり
三月に心室と仁和の心けちして仁わちをりあり
徳表をりあり今則ち皇命の二階邪形と又兼平
愛所あり此物功の未存に最平の心をけちして
仁わちをりあり又仁和の心けちして仁わちをりあり
仁和の心けちして仁わちをりあり

この宮乃のりあり 昇生程の心けちして仁わちをりあり
女三三ののりあり 仁和の心けちして仁わちをりあり
況のらわちをりあり 仁和の心けちして仁わちをりあり

未存にのりあり 仁和の心けちして仁わちをりあり

仁わちをりあり 仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

仁和の心けちして仁わちをりあり

の御女子なれいこころやとくわたりた

こころせしうゝこのころやと

あはれにのれし事

あはれにのれし事

たわれいさあわらぬわらぬとくわたりた
私げうよちぬん品今世をうらむらふあはれ
なう世のふよあはれにのれし事

世のうらむらふあはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

女二女二女二女二女二女二女二女二女二女二

三月三十一日

白雲子

あはれにのれし事

女二女二女二女二女二女二女二女二女二女二

女二女二女二女二女二女二女二女二女二女二

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

あはれにのれし事

朱存の御痛氣をうたはせりていふこと
此物のせむしきと記しなむと
えい朱存の御痛氣をうたはせりていふこと

み近臣に程なきいふこと
み近臣に程なきいふこと

朱存の御痛氣をうたはせりていふこと

中納言の者
又魯の朱存へいふこと

藤原の御痛氣をうたはせりていふこと

相量の御痛氣をうたはせりていふこと
朱存の御痛氣をうたはせりていふこと

いふこと

勝月史の御痛氣をうたはせりていふこと

以根報悉市下勝詩

の御痛氣をうたはせりていふこと

朱存の御痛氣をうたはせりていふこと

私にこそおまはりたる御痛氣をうたはせりていふこと

今こそ又おまはりたる御痛氣をうたはせりていふこと

朱存の御痛氣をうたはせりていふこと

人のにやれんやとあはれぬ御痛氣をうたはせりていふこと

作

ねは戸のうらうらいのまぶし作れい返るよは
夕音初めの時のれいこくやよ返るよは

こしこし入る

は年しりてとりあんとす

カタ音のこりこりのまぶし

大木のまぶし 平松

りうりのつれづれ

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

叔院のほのほのまぶし 叔院のほのほのまぶし

平源はよまぶしはははははははははははは

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

あふよそくあふよそくあふよそくあふよそく

この院より 必言多院に

下んしつらうの御つて

又は書とのありきを甚なりしとぬんのでありき 平

必多院の 必権入平

ありきありきけり 必ありきけり

つそとらふり 必多院の必何

返したとき 必ありきけり

あはけしき 必ありきけり 必ありきけり

いりや 必ありきけり

これげげ 必平 必多院

あはけしき 必ありきけり

必女 必ありきけり 必ありきけり

女 の ありきけり

いりや 必ありきけり 必ありきけり

九條 必ありきけり 必ありきけり

しの者の事 必ありきけり

必ありきけり

女三のありきけり

必平

必系圖のありき

必多院のありき

この文あり

必女三のありき

必ありきけり

必ありきけり

必ありきけり

必ありきけり

必の作は女三のありき

の院

必多院

必ありきけり

必ありきけり

すうこつしりかたにん

うなをききしりかたにん

未生のおよむとのこのあつてんか

そのれいづつしりかたにん

しりあつてんか

そのおれよ

ちよののちよ

しりんとすま

未生ののちよ

しりんとすま

しり力の位

しりわのちよ

未生ののちよ

しりわのちよ

しりんとすま

未生ののちよ

しりわのちよ

初日中午の初

未生の院

しりわのちよ

未生ののちよ

しりわのちよ

未生の院

しりわのちよ

未生ののちよ

しりわのちよ

未生ののちよ

未生ののちよ

しりわのちよ

未生ののちよ

未生ののちよ

少しくせりて女三の文原氏の家なりけり
多院かきすすやいわたるしつゝ
中つらなむと女三をけりて
二舟のふかきやうねを
いふにやいかりのん枝りゆつ
をけりて女三の文原氏を
いふにや又あつちつちの
しげきりてわすまけり

あつちつちの文原氏
すけつちつちの文原氏
必原のり極秘力のらふ
よひつちつちの文原氏
平原氏のいふに
人のいふにや
つれづれ人のいふに

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

いふにや

あつちつちの文原氏

先のし又こののりつ

女三のうねと屋中守とね後とやを若花(ア)入

あやしの御りとい屋中守をこしてり

の院あい 古き院

あやしのけびい 兼川(兼) 兼譲の心

あやしの心わい

あやしの中守の女三のめらねうううりー中のちあ

あやしのあはれ心わい

若花院と傳との中し本とあ実とふにかりり後

あやしのあはれ心わい

こく本のねんいふかをうりーあやしのあはれ心わい

の又あはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

若花院
字清海
印尺六

私達の心の中の人とね後とをねら列のまに勿後

あやしのあはれ心わい

凡人とあやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

あやしのあはれ心わい

ほんごうせぬり けい平

朱在のほんよ六条院よりらるる一むらめをよ
の年しし

おろ戸中弁 朱在のほんの中院(源)作

よのまのり(源)

四に希はよふに記しむすをよひま

んくちしし(源)中弁

そより源の(源)

いしし(源)中弁

平源廿九院(十三三)らるる

必朱在院(源)式よ二葉の兄(源)中弁

あしむをりやま

平せ死し(源)中弁

いられり(源)中弁

朱在の(源)中弁

ふらや(源)中弁

平(源)

源中(源)中弁

いしし(源)中弁

ふら(源)中弁

ま(源)中弁

あ(源)中弁

ら(源)中弁

か(源)中弁

の(源)中弁

う(源)中弁

平(源)中弁

私(源)中弁

さ(源)中弁

う(源)中弁

ほ(源)中弁

中納言

夕(源)中弁

いと強しとくちうらたけく

后中井のふ

うらたけくちうらたけく

未だの一定はありとて海を井のま

りをもうらたけく

源の正にも

いづれも

源の初女をいせまけらるるは父よまへりつては

あつちよとていれいれい

入内御のまへに 皇上前

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふは女御のまへ

いよとあつちよのふは女御のまへ

あの人をうらたけく

はあの人よとていれいれい

故院の雨内

弄化後

いよとあつちよのふは女御のまへ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

入道のま

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

いよとあつちよのふ

こゝしとらぬ

四月二十日ある御りより一國をあらわすに真の年とありぬ

よきことありぬ

朱雀院はいつら御をこころはゆかにしりぬ

ありあふ王に天曆六年四月廿七日を皇御乳母賀合婦告送云

院所心法を法入遷安可也七月一日奉二名法儀御物云

立西門外案内令も廿七日九日御心老意少日映心後順平

復之入東院近臣告御心老中云刻中奉月十三日法儀

良久之云 六日法今夜上皇御心儀篤十三日映上皇同後

入道

私云是東平の山門御心よりて法儀の事

けりしれ市

高子内親王の御心ゆにけりぬをより朱雀院の御心又

御心の時

李王に天曆六年十月廿六日高子内親王初服袴之親給

腰給其膳物後御厨子不介備之朱雀院奉四本以銀器備

膳日小葉二本以銀土器代備菓子親王家御多屏御等

一腰書法書卷朱雀院并殿之男女官袈其侍長十餘人召

弘微殿南廊給酒肴中宮職給祿

入殿の事

心相梁殿 朱雀院より昇

ぐら西の針

東宮故事曰後宮有素栢扇床也

栢殿者皇后御在所也 見九條右丞相曆記

三月二日侍朱雀院栢梁殿惜強春名分一字應

太上法皇製 採得淳字

三月二日宴于池上蓋思古之曲水也攝栢梁以擬蘭亭回花林

而栽櫻木皆是好閑亦樂無為風月重時節之取致之義也

請各分一字將惜強春云介請序 詩畧之云

御記云康保二年十月廿三日己未北日行幸院入自永安坊就

馬場殿垂輿抄栢殿檢延喜聖代之例每秋幸北院而

栢殿燒亡之後都無此事而去夏新攝栢殿至冬則作早故

設今日宴也

李部王記云天曆九年七月十日太上皇遷御朱雀院扈從云々
及非侍從兩馬助亦給座柏殿西對

私入殿のよしを記す

りありり后のつくり

嵯峨天皇弘仁八年男女衣服用唐法

周礼王后ノ衣服アリ花多ク身ナリ

周礼王后六服禕衣綸袂闕袂鞠衣展衣祿衣ト云リ

長恨歌傳云又命戴步搖聖金璫明年冊為貴妃半

后服用

はらゆひはありいれ

花康子内親王のゆりころゆい小一条后大女御の例

太后所記云兼平三年八月廿七日女御正裳正裳りりり

李王正記云承平三年七月廿七日康子ゆい初裳初裳以正

小一条后下外記結御裳腰滋路内依理髮尚侍結本結御叙二

隱兼地神云おわいのほらほらゆいゆいゆいゆいゆい

しらんあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

てこのあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

つらんあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

女三宮乃ゆいゆい被仕ねん

いりあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

小一条后

つらんあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

内春のあわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

内裏及上人又もあわわわわわわわわわわわわわわわわ

死人ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

蔵人所 納敷共、油所物等

平河女三宮所裳この内内をうみ乃ゆいゆいゆいゆい

死人ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

如何

一勅卷長人おしとの母の長人すくく洞をゆり

わりのわりの

まゝのなほりはあつてお

はまゝの腰ゆいをしてる者と号くと勅

是は八景の例なりとくはりのわりのをまゝとすりか

らるる唐知は徳壽園の三つ中へよとわれとるは

中へよとわれとるは

花のりこふとん髪との系成われとるの言とす

つらとく一わりの

必命又よとる一時のわり

昇米在院にわたりとる同林ぬすたり米在院の女三

一勅林ぬすたりのみまよとる時わりのわりの果

わりの

わりの

ひつとるわりの

えりおしのとを

必中女後を

院の殿と

は格をの米在院の殿と人なりとる

わりの

必は、みまよとる一時のわり

昇米在院にわたりとる同林ぬすたり米在院の女三

一勅林ぬすたりのみまよとる時わりのわりの果

わりの

必は、みまよとる一時のわり

昇米在院にわたりとる同林ぬすたり米在院の女三

一勅林ぬすたりのみまよとる時わりのわりの果

わりの

必は、みまよとる一時のわり

昇米在院にわたりとる同林ぬすたり米在院の女三

このわがやうな事さういふ事さういふ事初はしつゝのばり
考を今まつゝわが事の前よりさういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

あつたわが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

三日さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事
わが事さういふ事さういふ事

わが事さういふ事さういふ事

海のいとねるは雲とよみのつらきものなり

ののりて先

女とて

はるかにのりては女とて清くつらきものなり

けりては

平海のよきものなり

はるかにのりては女とて清くつらきものなり

いしりては

はるかにのりては女とて清くつらきものなり

あはれなるものなり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

のりては

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

はるかにのり

曾平公將出城倉者請曰他日若出則必命有司所之今衆
陳已駕矣有司未知所之敢請公曰將見孟子曰何者君
所為輕身以先於臣者以為賢乎礼義由賢者出而孟
子之後喪踰前喪君無見乎公曰諾 孟子二梁惠王下
人からん人からん人からん人からん人からん人からん

こころいそいそとわづらひのふま

山原の詞

しるしを急ぐのまらわ

必四條のしるし

中納言の細らりの詞

必十井の唐り履

人よりいそいそと

必掛符を中つり 必くちるま

必二東門院より六十段かゝるいそいそと 必は性も入道赤岡白鳥

必くちるま 必くちるまの岩れねと 必やん然つ

必あはれ物ね

必くちるま 必くちるまのまらわ

必くちるまのわづらひをいつねりといふいそいそと

必くちるまのわづらひをいつねりといふいそいそと

必くちるまのわづらひをいつねりといふいそいそと

せがれをいそいそと

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必南言

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

必くちるまのわづらひ

下... (一)

か... (一)

平和琴... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

給之寛平中以其名物而献之其後为宣陽殿生合号

旧之以此也

同正喜十七年四月廿三日此日返納一旦殿累代書法并殿自

取之今撰写切托返納在前只此大教本之細目叙其姓名

或有誤謬仍新作目錄一卷細註是名裝束及其訛謬

加以直之欲後未者見之頗有分別耳又加書法三卷足

二百卷凡殿子細具在目錄即令右近少将伊衡人

海行未檢納之

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

... (一)

いづこかといふはうらさか けあとのさき

海の家来かよはあとのよりいさをせむらう 海の家来かよはあ

かきそらりののり 昇かきそらりのり 海の家来かよはあ

必海の家来かよはあ 世にうらさか

世にうらさか

りつせれと申納とていんせりかき

りつせれと申納とていんせりかき けあとのさき

わりのあすかありとてあかのふよきゆい

海の家来かよはあ

こころのけい

必海の家来かよはあ

あけの後のさき

海の家来かよはあ

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

あけの後のさき

ゆらけのうらに宮のえんを

明乎のやうにやまのいづるうらみのゆらけ

私及川

ふらわやりのひらりひらり

ひらりのひらりひらりひらり

ひらりひらりひらり

ひらのひらり

何子城陰度借孫雪衛鼓声前未有新 度梅眺

必示天詩子城白示天升子城ト水方をりては

梅と流へる面白

昇子城詩心あり一勅子城水方城と云ふ

ついで示天の作を神

ひらりひらり

秋のひらりひらり

私と流のひらりひらり

ひらりひらりひらり

うらね城

必流をさるる

ありふらひらり

必流のひらりひらり

ひらりひらり

世よひらりひらり

ひらりひらり

ひらりひらり

ひらりひらりひらり

ひらりひらりひらり

ひらりひらりひらり

ひらりひらりひらり

わらわらひらりひらり

世の伝説

面白き此又あつりし世の世の横をさす
とてわうの世はかたはらまきしりし世

弄梅のうりしを梅の世はのんこ

とてわうの世はかたはらまきしりし世
うりしを梅の世はのんこ

花世と及む世をわうとてわうの世は
のうりしを梅の世はのんこ

弄春のちとてわうの世はのんこ
花世と及む世をわうとてわうの世は

海世のうりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

はつりしを梅の世はのんこ

はつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ
あつりしを梅の世はのんこ

あつりしを梅の世はのんこ

いしつらひつらふしつし

女三の朱卷の別々は冠裳とまじしふつたつは
不変なるもの原の心

おほいぬけりし

うらねりまのゆらなりよこ

んこもあつし

けあつつはよきゆらん

細末つらあつし

ひしつらあつし

平元年の町吾息をえぬ時

源の年つ時のれはあつし

松今源の年は世のわりはな見わじつらあつし

あつしつらあつし

きつはあつし

そこの人れあつし

うらねりまのゆらなりよこ

源氏の心よ女三の朱卷

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

あつしつらあつし

たふくおとするを

女このはしり

しき死のうしと脚せうしこいふあり

何世と早自世如

おもしろ人の

西院の山文乃句弄

つらねあつたゆりあわん

花女こと念とぬあいのこいれあ

かろうかあの人をまもるる

はゆらちた

式アア文 世と

先帝

薄雲女院

源公宮 女之宮の御女

朱在院ノ節

^{朱在}うりいしとよのせいのちんよ入らるるかひ

何世のうしはえぬりりいんよかた

けせあしよせり花んわ

下をいしけいあ

おもしろい

源の朱在の文とあつ世の御女

あつ

はしりいふ

世の朱在ありあつ

いし

必懐を束る

^世うし世のうしあつちりいんよかた

はらめせいのあんちんあつ

女のしり

朱在いしあ

朱在の御女の御

いふかといふかといふか
はるのよれしとていふか

はるのよれしとていふか

若者のいふこと女とのいふこと
いふこと女とのいふこと

若者のいふこと女とのいふこと
いふこと女とのいふこと

内侍のいふこと

いふこと女とのいふこと

二条のいふこと

平同云若者のいふこと

悪俗の父の殿二条

はるのよれしとていふか

女とのいふこと女とのいふこと

あつたあつたあつた

勝月兼若くは若者のいふこと

いふこと女とのいふこと

う乃せしとて

あつたあつたあつた

いふこと女とのいふこと

若くは若者のいふこと

いふこと女とのいふこと

あつたあつたあつた

いふこと女とのいふこと

若くは若者のいふこと

あつたあつたあつた

いふこと女とのいふこと

あつたあつたあつた

いふこと女とのいふこと

あつたあつたあつた

人伝てあつてものさし

そにわ原のわお出ぶひのよここあつた

ひつしあつてはんを

勝のふこ者のやまの原のまのこいんを

しけいしあつてはんを

あつたあつた

山山あつたあつた

けいんあつたあつた

原のわお出ぶひのよここあつた

そにわ原のわお出ぶひのよここあつた

あつたあつた

けいんあつたあつた

原のわお出ぶひのよここあつた

そにわ原のわお出ぶひのよここあつた

あつたあつた

山山あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
きねもぬれぬわらふとく福あふちたりとさへ
對面あはれぬとてさうさうさうさうさうさうさう
このあはれを

いよとのわらふとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
ゆりゆり

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
中今また
わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ
わがあらのならむとあつこふと成はぬのこゝろのあはれ

いとうのくーぢよ
内名の姫君のこは

にりひんこをま

必世とら御さるまのめさる(一)とねん(二)

り中ふかたり

必女こまの(り)

じの御もら

必世とら御さるまのめさる(一)とねん(二)

中納言の先ね

必女こまの御さるまのめ

にかささした 世の御親教の世

わつやとら御さるまのめさる(一)とねん(二)

ねに御さる女こまの御さるまのめさる(一)とねん(二)

ねに御さる女こまの御さるまのめさる(一)とねん(二)

つらつらと女こまの御さるまのめさる(一)とねん(二)

西の他は御さるまのめさる(一)とねん(二)

おつらとら

いとうの御さるまのめさる(一)とねん(二)

必女こまの御さるまのめ

つらつらと女こまの御さるまのめさる(一)とねん(二)

つらつらと

世の御さるまのめさる(一)とねん(二)

つらつらと

必女こまの御さるまのめ

つらつらと女こまの御さるまのめさる(一)とねん(二)

つらつらと

必系上ノ詞

早未雀はよりい御さるまのめさる(一)とねん(二)

つらつらと

世の御さるまのめさる(一)とねん(二)

つらつらと

必女こまの御さるまのめさる(一)とねん(二)

予はよつせりて又下りて

女三のめりて望のけりしとらふと人の世を
しつるし源の世切りしゆゆらあやうけりて又や
すしつる人のついでに推量せりしつる世より女三
の世けりしけりしつる世

世同よとてのつりしつる世のつる世

神皇正統記の院の世のつる世

心原のつる世のつる世

心原のつる世のつる世

延喜十三年十月十四日見日於西方賜尚侍友原朝臣
李朝王記云延喜四年九月廿六日京極御息所奉仕は

六十加々

延喜五年二月廿五日彈正親王為政の女十女於桃園云

設は會奉造某所仙像奉字樂所金剛壽令般若心經
延長七年九月七日石下諸息所人共於信寺設入十加々
命とて信寺此盧那像前五重銀樂所如來像
天曆三年二月十五日右兵衛督師白河為不相公貞信七
十賀於信寺寺勝堂依代令七仙某所像字金字壽
命經七十卷 こと李朝王記

らりのつる世 世實

さいせりてつる世のつる世

最勝王經十卷題目金光明最勝王經令般若
壽令經一卷題目仙託一切如來金剛壽令陀羅尼經

寛くゆつる世のつる世

山嶺の世

かゝる事ありはありまわ

権佐を申ししはかの人じありまゝとてあるは
御座るやうにせしむ

山浦後 面この原乃御いりり先よすま

サニリを申ししはありま
再ありしはサ旨御座りありて旨サ旨子りありは御座り
必とて今年後へむろりし二りサ旨より御座りありは御座り

とあり子細わりの日サ旨より御座りありは御座り
らるるのりしは御座りありて一後とて御座りあり

をあるのりしは御座りあり

あつ院 とうすのりしは御座りあり
必とて御座りありて一後とて御座りあり

以下乃御座りありて一後とて御座りあり
半回とて御座りありて一後とて御座りあり

仏徒衆しありは御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

わと二条院ありて一後とて御座りあり
のりしは御座りありて一後とて御座りあり

あつ院 一福合点
早はとありて一後とて御座りあり

はとありて一後とて御座りあり
此とありて一後とて御座りあり

御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

御座りありて一後とて御座りあり
御座りありて一後とて御座りあり

但日本執政の附小政亦列あるを今よりいへば
院中の儀をあるまじし儀ありてしよのころを
たつとて院号の及し行中とていふべし但院とて
く中といふよりいへばさうもや復反中とてありて
ぬりしとていへばさうもや復反中とてありて
花宮との家司とていふかや小政亦とていふか
ふよりいへばさうもや復反中とてありて
いふかやいへばさうもや復反中とてありて

必は上を小政亦とていへばさうもや復反中とてありて
源とていふかやいへばさうもや復反中とてありて
のころをたつとて院号の及し行中とていふべし
并小方のころをたつとて院号の及し行中とていふべし
一勅があり家司を云又同云小政亦とていふべし
一各親柄家柄園よりいへばさうもや復反中とてありて
此の系式ありていへばさうもや復反中とてありて
山きいへばさうもや復反中とてありて

此の御所城の金匱のやうなり為但二帝位の記
なりつとていへばさうもや復反中とてありて

子とていふかやいへばさうもや復反中とてありて

ひつらひのころをたつとて院号の及し行中とていふべし
しつらひのころをたつとて院号の及し行中とていふべし
ふとていふかやいへばさうもや復反中とてありて

平序曰

不意とていへばさうもや復反中とてありて

ノ帝乃其代をたつとて院号の及し行中とていふべし

入居のま 必は上を小政亦とていへばさうもや復反中とてありて

早廿七とていへばさうもや復反中とてありて

内小とていふかやいへばさうもや復反中とてありて

田いとていへばさうもや復反中とてありて

あの際りいへばさうもや復反中とてありて

世のわがわがのふゆのこまわり

天子の父の初親とて行なわれしは、
これいさやうにやれりしを、
仍にわがふゆのこまわりをせりし

世中のこまわり

吾君不遊有隙意一人出少不容易
六官後今百目倫
八十一車千方騎朝有宴飲暮有賜
中人之序教百家未
兄元君一日貴 白文集 躑言高

いあひのこまわり

必申文社好くすはのひか
申記に延長十六年十二月廿一日
申務の祝を奉る御善願
奉寫壽命經此日於仁和寺
設け會
私に玉鬘尚侍此と度度の
ひか正力と十月とつ
三と

りいあひの日いそい十二月廿一日
をサリわらり
のこまわり

あな中のありき
あなの中れ七と
うのこれいそい十二月廿一日

下李ア王記に延長三年十二月十九日
内裏奉修古堂院
賀備行玉城七と寺合布六千端
追京七と寺納六百正則於
朱雀嶽賑給初欲依例奉仕
所賀然自彼院有所清也
停心如故是而已耳

所記延長四年十二月十九日
宣此日奉為太上皇息
興增室壽於
京邊七と寺南
京七と寺 東大興福元興天安
藥師西天法隆
所用納六百正布六千端
云

貞觀十年遣使於邊京
四十と寺平城四十と寺
修轉經切
錢寺別有教
賀皇太后
四算

延喜二年天子四十算
布四千端
十三大寺
諷誦を修る

四十寺
并有例
同云
延喜都
四十寺の
有不定
一劫又
畧別
寺
定

平四年三月中宮御賀七ヶ寺東西延暦極示寺者極經其
布旅東大與福大安業師延曆寺各五百法西大注隆東西極
示寺各四百法奉為中宮息災延命也
有りりしこといんらんを

必中宮の心公のしりし
らるやとくやとてしりし

昇原の心公をさるりし
必二親の心を公のしりし
又ノ系統母ノ二親トモ信シテ其ノ志ヲトリス

私に秘儀のしりし
必何れをさるりし
又ノ系統母ノ二親トモ信シテ其ノ志ヲトリス

必何れをさるりし
必何れをさるりし

仁明天皇十四年十一月朔天曆四十二崩東三奈院於山崩

石人將定國延喜六年行四十年七月氣をさるりし

昭宣云貞觀十七年十月朔一死して五十七を氣をさるりし
延喜十九年十月朔一死して七十歳を氣をさるりし

仁明天皇十四年十一月朔天曆四十二崩東三奈院於山崩

必何れをさるりし
必何れをさるりし

必何れをさるりし
必何れをさるりし

必何れをさるりし
必何れをさるりし

必何れをさるりし
必何れをさるりし

必何れをさるりし
必何れをさるりし

このおとしやしらぬの志すくすくは 宿徳

致仕大臣のうまきまきくくは宿徳こりこりあきし
おとしやしらぬの志すくすくは

けりひてりやまきり

再びと宸筆のし給へ 進すまきり給へ私不定すの之

必宸筆をさうりあきり

私云つゝあきのしはわかれ宸筆よりあきりあきり
かきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

新儀式に女屋に同副小侍立侍和は年記屏風三所御

帳東に月屏風一所御を天皇御筆下

延七七年三月廿日大后日記にわかれのし給へを寧頼のあ
つゝまきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

拾遺集右大臣定國に十のあきりあきり屏風胡へ

かきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

かきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり
屏風のあきりあきり

春採のしはあきりあきりあきりあきりあきりあきり
あきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

私に餘の屏風よりあきりあきりあきりあきりあきりあきり
屏風はまきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

きり物のしはあきりあきりあきりあきりあきりあきり

は清涼及置物御厨子置板 孝道記

小中一階云量物中二階 右筆箱 拍子 中三階 筆

中二階 和琴打物をいあきりあきりあきりあきりあきり
先羯鼓 大竜橋

次太鼓 次鉦鼓 拍子 拍子

はるあきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

心よりあきりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

延七二年正月廿五日自宇多院被奉る榮於内裏院に

かきしよえ

致仕下ト和琴こつりもて名のりあつたゆをいひて
つらゆめいひはりるまはりてを

海軍と致仕といふれあふりなれを

ゆをとりゆよとくはりよとてゆめいひのゆこまよとて
まはりのゆこまよのゆめいひのゆめいひのゆめいひ
いれそゆ車よをいひゆめいひまはりて

はつらの中い唐手也

梁書曰西湯王大鈞字仁傳年七歲高祖帝之賜王羲之
書一卷

延長二年四月卯初之町口の川物也山城四年後一畏琴
和琴各一面一枚也

又延長御賀横笛琴箏和琴吹取一物各有其
袋笛着松枝日御引物也見御記

太后日記兼平四年十二月九日所記かきしよえゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ

延長二年四月卯初之町口の川物也山城四年後一畏琴

かきしよえゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ

必らこのゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ

延長二年十二月廿日中宮奉仕内裏以於吏部王紀宴酬

蔡琰唐
女手書
名

延長二年十二月廿日中宮奉仕内裏以於吏部王紀宴酬
凡る延長二四年大又自中宮以方執樂於又相當以所記
亦一執北邊大和清和御時書元清和七合献筆春書付木枝
次八条中納言執琵琶次琴箏和琴或り親王同之者
奏曰后宮奉負大臣譜以次称名

兼平四年三月九日在任中宮御加貞信不及祿退也退作
祿并手跡和琴亦本万葉集入宮二合と兼延長二年の

ゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ
王記よとるゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ

の引か物也延長二年の例よいおのゆめいひのゆこまよのゆめいひ
中宮乃ゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ

ゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ
万葉集の中宮をゆめいひの子細は太后の日記

ゆめいひのゆこまよのゆめいひのゆこまよのゆめいひ

うーかゝりぬ

必深氏は十一郎と一からん

花深氏。言す

きりつたのほろつらつらぬはより

は産らるる

ゆいこにまをこめしつ

必いりしつてまをこの事也 花深

まをいりしつて

明石姫君十白殿に花

あをく

は棠花物語と上東門院あか かくは

か物の氣れん

あしはまられ中あ

昇心あ

必明石とあ

私昇心あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

必明石とあ

あしはまられ中あ

必明石とあ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

あしはまられ中あ

いさかひにわたりしものれは

源氏帰京乃内明石とこの夜をともたけりて

上姫君と下姫君のゆゑにうつくしき御座りしと

けしあはれはありけり

下姫君乃御公のうら

公のうらよ

されを姫君の心の中

うきをいり

族姓あとの配運上徳梅あちかよはれは

子さちゆへよととてうきしものあは

身をたふ又あつたのよ

くしりくまふかたは我あふみわ

世人の心の特

私弄よりこの

いさあまりにわたり

心あまの心

かの入道乃 明石入念

仙人の せし 私弄の

にせぬしあはれ

明石姫君の心

心あまの

目あまの

あはれこの

か

らに

心

必

心

心

必年ありしは... 殺の家河海に...

わ... 物...

心... 物...

い... 物...

す... 物...

と... 物...

の... 物...

の... 物...

わ... 物...

明... 物...

い... 物...

必... 物...

く... 物...

す... 物...

ひ... 物...

嘖... 物...

そ... 物...

は... 物...

あ... 物...

必... 物...

私... 物...

あ... 物...

必... 物...

昔... 物...

長文の宣旨ありけりとの事

平河内侍の事

平河内侍の事と云ふ人の宣旨と号はる人一勅宣ふ
宣旨の事と云ふ人の宣旨と号はる人一勅宣ふ
宣旨の事と云ふ人の宣旨と号はる人一勅宣ふ

勅賜湯取日時
正徳七年五月

在し倭公臣
信明経鳴強宗

在りか將伊予
乳母又和奉任陽

依依此女能知
也致平中御言

室官根利
奉任四村湯

私に引く湯

私に引く湯

必の姫君の事

明日と云ふ宣旨の事

六日と云ふ宣旨の事

十日に於て

内々此の事
或は

延喜七年七月廿日

内裏より

あつた

かゝ銀の筭

きぬ綿布

人々

朱雀院

延喜九年

天慶の

させぬ

一勅

基平、鉄産也
其上用事仙境
既つた脱したる
新儀式
内産市先中使
被奉回三七夜作
内奉宗全
有賜禄
女所更衣産明
七夜遣使賜物

求无為道不得相許生死之緣瞿夷即言我不從我願花
不可得善惠又曰汝若決定不與我花當從汝願我好布施
不逆人意善惠若使有求從我求凡願目髓腦及身及妻子汝莫
生疑壞吾施心瞿夷答言敬從來命今我女弱不能得前
併寄二花以獻於佛使我生々不失此願好醜不離心置心
中令仏知之時灯照王願諸官庶持妙香花種々供具出城
迎佛王臣禮敬敬獻名花香隨地善惠見諸諸人衆供養畢
已歸觀如來相好之容欲滿種智度衆生故即散五花皆住空
中他成花臺後散二莖亦上於空余時王氏龍天八部見此
奇特歎未曾有於是普光如來讚曰善哉汝以是行過億
劫當得成佛号曰救世牟尼既授記已佛經行處而地濁善惠
即脫所著鹿之皮衣以用布地解髮覆已佛踐而度復記
之曰汝後得佛當於五濁惡世度諸天人不以為難必如我也
是時善投佛出家白言世尊我昨得此五種奇夢一者夢卧
大海二者夢枕須弥三者夢諸衆生入我身内四者夢并
執日五者夢中執月唯願世尊為我解脫普光答曰夢卧

海者汝在生死大海之中夢枕須弥者出於生死夢諸
衆生入身内者為彼作歸依處夢執日者智光普照夢
執月者清涼度生今離執此夢因緣是汝將來成佛之
相善惠聞已不勝踊躍大藏經今案内典外典より及て之
の奇夢をこけりしとてこの物語をいつる所の善惠仙人の又後
の事をもつてまゝに須弥の山を梵語よむ徳意慮山居士妙
言山といふに室がけつらわらうとて妙といふ地に中分
中分地ありて二分中分合十六分中分の山がらふとて
かいつらて東南ふよに列わり日月の山は半腹をあらけ
をてててててててててててててててててててててて
夜の夢をいふとてててててててててててててててて
おつててててててててててててててててててててて
これの事とてててててててててててててててててて
中分日とてててててててててててててててててて
及ててててててててててててててててててて

らあといふのふる世々のいれ業をたしむる公をい
ふ所極とみらると人よあつてぬといひ山といひるは海と
うらなとていふあつたの所極とみらると海と幸と極り
あつたふらと我力ららうといふと舟とありて物をこしてい入る
般のふらと極とては死の海とやうて西方極東の岸と
いふとふらとふらと極とては二世り極とていふとふらと
ふらと極とていふと極とていふと極とていふと極とていふと
一今といふと極とていふと極とていふと極とていふと極と
各々の極とていふと極とていふと極とていふと極とていふと
かたはとていふと極とていふと極とていふと極とていふと
渡天乃あは極とていふと極とていふと極とていふと極と
又安よ日月と春とふらと極とていふと極とていふと極と
明れらとていふと極とていふと極とていふと極とていふと
を極とていふと極とていふと極とていふと極とていふと
信とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と
のふ極とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

法抄よひのふらと極とていふと極とていふと極とていふと

うらなといふと極とていふと極とていふと極とていふと

僧とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

又極とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

といふと極とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

周礼とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

明とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

又説とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

九經論とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

浄土とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

律宗の好相とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

又仙奉行集とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

王台とていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

右服彼女とていふと極とていふと極とていふと極とていふと

かたはとていふと極とていふと極とていふと極とていふと

すうらとていふと極とていふと極とていふと極とていふと極と

又西名とせしむれば家入者しつる事とすとも
又此國乃亦ふとて次の詞とされは他國の事也

又此國の事也

近來中ねとすくは極戸なるよりしつる事也

りつる事

秘のつる事の果報とすありし事也 秘の名始末とす

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

此東一人念仏名西方便有一蓮生但使一付常不退

此花蓮到此回迎 是照禪師五舍法事讀

あつたすきし山ものより思ふく 秘を思ふは遠去の奴侍なり

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

秘のつる事とすありし事也

連又母乃ら南を益とすを依れ内名との力おわらば
いそろの具を非とす市と志としや他我とい変化の
物とありなせとらと河海よい言せの中れ化生とい
一事とあるは身と人界の初初の時と化生可なり
みしれいの変化といふは仏菩薩の教力或は定力より
て若くは業を感じてくるにうのこらと現ゆらむ
愛易生死といふは布袋和ある強勸の變化寒山拾
得ハ文殊普賢といふこと 内名入る変化の物とい
ふことよきふとくんと志とせり

身けの物也

は変化 心身变化生ん

私此かよるにるまきとくはとる物へ

秘要養國

秘要養國

しむりあのこににりり

は到彼岸梵波羅密

世婆世界の如

善導大師の語に極到淨土安養界とす未我國

度人天の如

のやしり

任吾の社

死文とい

私す出るもの

りんのふとらとらんとら

陀文箱

何封籠

をよの月十をりよなん

十日日こりつす

称名義

私曰近代よ及て言とらりといふ十言の言といふニ

ニシウニニト云トと来し文字といふ十言の言といふ

ニシウヨカト云トと此物説るニシウニニトニシウニニト後テ

物(す)

くは行かりみおし施し作りめん然狼

何薩埵王子飢虎よ力と施しぬん

於力とす山よ入り成る心守るものことと志し

平

わさうつたちあて

花の影のうらみ浄を

あめつうのうらみ浄を

舟使のち極り初

あつちのうらみ

海山あつちのうらみ

手あに
天は海
三文字

人とのうらみ浄を

ちあつち

使乃大徳の自稱

いま世にうらみ浄を

のうらみ浄を

またつちのうらみ浄を

わさうつたちあて

入道のうらみ浄を

施入のうらみ浄を

うらみ浄を

仙のうらみ浄を

わさうつたちあて

常在のうらみ浄を

仙のうらみ浄を

花佛涅槃のうらみ浄を

神血現浄に盈目生大苦惱

秘仙の常在のうらみ浄を

わさうつたちあて

わさうつたちあて

わさうつたちあて

わさうつたちあて

わさうつたちあて

明るをわが者のこころにあらわすにうたはせむ
しをねをあらわれたる中をよこせし世の思ひは居るの
ゆゑにわが心はくちかきやちかきやちかきやちかきやの
あつた
昇りりちかきやちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
居るのこころをわが心はくちかきやちかきやちかきや
此よりこころをわが心はくちかきやちかきやちかきや
行末のこころをわが心はくちかきやちかきやちかきや
しるはくちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
年月のたつたをわが心はくちかきやちかきやちかきや
よ又ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
私入るの海はくちかきやちかきやちかきやちかきや
京の門はくちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
しるはくちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
またさくちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや
ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや

あまのこころ

ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや

君乃臣

ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや

あまのこころ

各苗半坐素花葉待我園同浮月行人

ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや

秋原の風

ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや

ねをわが心はくちかきやちかきやちかきやちかきや

ちかきやちかきやちかきやちかきやちかきや

ちかきやちかきや

昇明をわが心はくちかきやちかきやちかきや

又ちかきやちかきや

昇明の風

入るのこころをわが心はくちかきやちかきやちかきや

卯くくわく

弄明るのよきり

くわくわくわんちん

ゆきと初らまのわんちん

くわくわくわんちん

秘姫をい知物あつちり

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

秘姫をい知物あつちり

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

秘姫のわんちん

ゆきと初らまのわんちん

すなはち姫君申上りも又御位よつこすはけ
多しめりまゝも又よつこりあつてまはす

又うらまゝくつやこれいよすま

秘伝ちいあせに名あつて後と入らるゝ
おむかりありし平忠の中は様

いつやこれいよ

ふによつこりあつてゆゑもあつて入るはけ
しつこりあつてまはす

このよつこり

秘伝の方りの文様

まゝりこつこりあつて

秘傳より姫君よつこりあつて

先づしつこりあつて

平忠の文の所公より

あつて

秘傳の姫君よつこりあつて

此物よりいよつこりあつて
妻女郎よりいよつこりあつて

同い皇子のつこりあつて
あつてのつこりあつて
二条后とあつてのつこりあつて

ありあつて

御いよつこりあつて

わつこりあつて

姫君のつこりあつて

けつこりあつて

今もつこりあつて
いよつこりあつて

けつこりあつて

あつてのつこりあつて

おやうよふりあひん

秘姫元の所へ

おひきまうらひん

秘明るとうらひん

世中こころを

秘力のこころを

行中を

は二原女所の心と物とを

ぬりこのおよそ

必結終ると

いここの

弄あひ人のこころ

あやこころ

入るの

脚元文

こころの

秘文よの

つら

姫君と

こころ

明るの

あひの

弄世

あひの

秘明るの

弄初

あひの

姫君と

あひの

おやうよふりあひん

秘姫元の所へ

おひきまうらひん

秘明るとうらひん

世中こころを

秘力のこころを

行中を

は二原女所の心と物とを

ぬりこのおよそ

必結終ると

いここの

弄あひ人のこころ

あやこころ

入るの

脚元文

こころの

秘文よの

つら

姫君と

こころ

明るの

あひの

弄世

あひの

秘明るの

弄初

あひの

姫君と

あひの

私女との母もいそいそと

めわすれらるる口をきき

秘傳のわや〜とるぬふ

〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

り〜とるぬふ

わや〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

めわすれい〜とるぬふ

明るのとつたらのものも〜とるぬふ〜とるぬふ

仰いのれお枝 へ〜とるぬふ

あつらひのまゝに隠れ危の敷と〜とるぬふ〜とるぬふ

秘傳を〜とるぬふ

ま〜とるぬふ 秘傳

きよあ〜とるぬふ 秘傳

いよわ〜とるぬふ

そ〜とるぬふの秘傳と修〜とるぬふと保の〜とるぬふ

〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

明る入るの母も〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

罪を減せん〜とるぬふのき〜とるぬふ〜とるぬふ

明る入る年は〜とるぬふ〜とるぬふの隠〜とるぬふ

〜とるぬふ〜とるぬふ

必き信〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

〜とるぬふの道者〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

何〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

す母の〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

い〜とるぬふの母も〜とるぬふ〜とるぬふ

け神も〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

ふ〜とるぬふ

秘〜とるぬふの自由〜とるぬふ

り〜とるぬふの母も〜とるぬふ〜とるぬふ

あ〜とるぬふの母も〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

〜とるぬふの母も〜とるぬふ〜とるぬふ〜とるぬふ

これ又ぐくくくくくくくく

何ゆゑに各の教に深かき心のおり具してまはるべ
しに侍り侍るべし

秘源の御乳をまき入してつてまはるべし

いづれに侍り侍るべし

秘原の教へ教訓するの由來に各の文にまはるべし
ありしものゆゑに

秘此等の由來に入らむとていづれに侍り侍るべし
りて侍り侍るべし

秘又婦人の中へ入り及りて

とて侍り侍るべし

秘非道なる地へ入らむとて侍り侍るべし
侍り侍るべし

秘いづれに侍り侍るべし
侍り侍るべし

侍り侍るべし

秘大いづれに侍り侍るべし

侍り侍るべし

侍り侍るべし

秘此等の由來に入らむとて

侍り侍るべし

侍り侍るべし

秘此等の由來に入らむとて

侍り侍るべし

侍り侍るべし

秘此等の由來に入らむとて

侍り侍るべし

侍り侍るべし

秘此等の由來に入らむとて

侍り侍るべし

秘此等の由來に入らむとて

侍り侍るべし

をらんむむりしるやゆとを

秘入石の陰丹をりし年

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

江守御文 耶輸多滯福地の園上候もつたわえ必有為の御上

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

秘入すこのつりしひしものゆゑとの申をりし

必耶輸多滯一 言奥入破し伊勢地純地原に候

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

あつらひのうねりしつゆもつとせせ

秘入之難有北龍此言秘候も知秘候元倍もしこ

いづれかしのつらきあはれいづれか

女もいづれかしのつらきあはれいづれか

けうとうあはれいづれか

秘伝の秘伝ありあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

世もいづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

秘伝の秘伝ありあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

千代の名をいづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

秘伝の秘伝ありあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

いづれかしのつらきあはれいづれか

後小と先と

女三乃相ありしに

多しのふり

女三乃相ありしに

かこ

秘相ありしに

を

秘女

小侍

秘女

し

と

か

秘原

秘原

平源氏の

秘原

秘原

秘原

秘原

秘原

秘原

秘原

秘原

秘原

秘原

劉向別録曰楚鞠者傳曰黃帝昭作或曰楚國時詭
黃帝踏鞠之執也以練武士知有文也今軍士無事得
使踏鞠有書廿五篇

て斟酌とありやとてこのゆゑ

つひののよりいよて

後詞と古くは後、御物に斟酌ありて成通とす
未通とて御物に六十七年と鞠とて御物に

ゆらひいよてやうてなりや

花怪いすまのゆゑに御物に御物に

前よとてありりいよて御物に御物に

よの軽とてありりいよて御物に御物に

平一勅とてありりいよて御物に御物に

ゆゑに御物に御物に御物に御物に

わりのちからりいよて御物に御物に

前黄 いよて御物に御物に御物に御物に

秘とてありりいよて御物に御物に

赤門啓のゆゑに御物に御物に御物に御物に

わくわくいよて御物に御物に 柏木

ゆゑに御物に御物に御物に御物に

花霞殿の南しりいよて御物に御物に

ゆゑに御物に御物に御物に御物に

秘とてありりいよて御物に御物に

にとも文字とてありりいよて御物に御物に

ゆゑに御物に御物に御物に御物に

しんがかり

かうありのいよて御物に御物に御物に御物に

何朝後日高冠額板

平多鞠とてありりいよて御物に御物に

ゆゑに御物に御物に御物に御物に

平表白裏襦袢

ゆゑに御物に御物に御物に御物に

花とてありりいよて御物に御物に御物に御物に

つれづれ

秘社字上指書のつれづれ中家流つれづれとこしは鞠
けつつとつれづれ種に流れりとは何分なれはゆわ
つれづれつれづれつれづれの指書とつれづれつれづれの指
書とつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

秘社字上あつれづれつれづれつれづれつれづれ

秘社字上懸の枝をりつれづれつれづれつれづれつれづれ

秘社字上つれづれつれづれつれづれつれづれ

資雅つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

鞠の譜も成通つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

河中階先制未劫 秘社字上つれづれつれづれつれづれ

秘社字上つれづれつれづれ

秘社字上つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

秘社字上つれづれつれづれつれづれ

秘社字上つれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

秘社字上つれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

つれづれつれづれつれづれつれづれつれづれ

くろくろくろくろく 女よのいほふり

ちねいししししししししし

夕音しせむをくろくを

うらうらうらうらうらう

夕音おほくろくろくろくろく

うらうらうらうらうらう

秘夕音こししししししししし

秘夕音のつるゆししししし

猫りぼくくくくくくくくく

たよ屋のししししししし

まさたししししししししし

夕音のらしし 柏木のんくろく

ねこをまさのししししし

ししししししししししししし

ふいのしあふれりしし 秘世と御方

花よの射るぬれぬししししし

くろくろくろくろく

ちねちねちねちね

わしししししししししししし

秘つらつらつらつらつらつら

何様餅 椿の葉ししししししし

あまろくろくろくろくろくろく

うらや煙のうらや煙のうらや

かきししししししししししし

くわねくろくろく 昇ろりれ

秘 柏のうら

秘 看かろくろく 果つししししし

秘 ねししししししししししし

くろくろくろくろく 柏木のらよ

ら
今より久しき前ありわしは地をさしりて
應徳二年二月十六日

よ母に
い

柏木の地を女この見ぬや
あやあ

は
秘

私
わ

人
柏

信
い

い

小
い

い
い

い
い

い
い

い
い

い
い

い
い

い
い



